

要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	四 倉 絵 里 沙
主 論 文 題 名				
Current Prevalence of Myopia and Association of Myopia With Environmental Factors Among Schoolchildren in Japan (日本の小中学生における最新の近視有病率と近視関連環境因子)				
(内容の要旨)				
<p>東京都内の小中学生約1,400人を対象とした近視疫学研究を行い、日本における近視有病率を約20年ぶりに報告し、近視とドライアイに関連がある可能性も見出した。</p> <p>近視が発症・進行する原因の詳細なメカニズムはいまだ不明だが、近視の人口は世界的に増加しており、このまま増加し続けた場合、世界の近視人口は2050年には約50億人になるという予測が報告されている。この近視人口の世界的な増加傾向は約50年前から始まり、特にアジア系に多いことが知られている。2005年度の厚生労働省の報告では、日本における失明原因疾患の第4位に強度近視が挙げられ、近視予防は急務であるにもかかわらず、日本で小児期の近視有病率は1990年代以後報告されてこなかった。</p> <p>そこで東京都内小中学校の全校生徒1,478名（小学生/中学生：726/752名）のうち、保護者から同意が得られ、かつ検査当日出席した1,429名に対し、非調節麻痺下他覚屈折値と眼軸長を測定した。そのうち、近視進行予防の治療を行っている生徒や、視機能に影響を及ぼす眼疾患の既往のある生徒を除いた1,416名のデータを解析した。</p> <p>その結果、小学生689人における近視有病率は76.5%であり、強度近視有病率は4.0%だった。特に小学1年生時点での近視有病率は、既に60%を超えていることが明らかになった。また平均屈折値は-1.73 ± 1.98 D、平均眼軸長は23.41 ± 1.03 mmだった。</p> <p>中学生727人における近視有病率は94.9%、強度近視有病率は11.3%で、中学生の3学年全てにおいて、近視有病率は90%を超えたという結果だった。これは、東アジアの他国の既報よりも高い有病率であり、中学生期における近視が深刻なものであることが示された。平均屈折値は-3.09 ± 2.26 D、平均眼軸長は24.73 ± 1.19 mmであり、強度近視（眼軸長26.0 mm以上）有病率は15.2%だった。</p> <p>さらに、アンケート項目のドライアイの評価（Schaumberg's questionnaire 日本語版）により、ドライアイがあると答えた小中学生は近視傾向であることが明らかとなった。</p> <p>本研究成果は、眼軸長測定を含めた日本初の近視有病率のデータであり、近年の小中学生の近視に関する最新の基礎データとなる。本調査結果が、近視の増加に対し警鐘を鳴らし、今後の近視人口・強度近視人口の増加に歯止めをかける一助になると期待される。</p>				